

与謝野晶子が愛した湯河原

『みだれ髪』や『君死にたまふことなかれ』などを詠んだ歌人であり、また『源氏物語』をはじめとする古典文学の研究者でもあった与謝野晶子は、湯河原とのゆかりが深いことで知られています。

町では、晶子が湯河原を訪れた際に滞在した旧あるが旅館（当時は「真珠荘（庵）」・有賀氏経営）から、晶子直筆による掛軸、推敲を重ねた草稿など約70点を寄贈いただきました。

これらの資料は、晶子と湯河原のゆかりをあらためて知るうえで、たいへん貴重なものでした。



真珠荘から望む相模灘

晶子が過ごした南向きの部屋

晶子の真珠荘での滞在は、昭和7年のはじめからの訪問から、脳溢血で倒れる直前の昭和15年までの8年間に十数回にものぼります。その間、歌会を催したり、真珠荘を拠点に、湯治に出かけたり、また、箱根や伊豆に歌を作りに出かけたりもしました。

真珠荘に滞在する際、晶子は決まって南向きの日当たりのよい部屋を利用したそうです。相模灘や初島などを望むその部屋には、洋式の鏡台やベッドなども置かれていたため、晶子はそれらを利用していました。

明治4年に洋行を経験した晶子は、昭和の初め頃まで、洋装を好んで帽子などをかぶっていたこともあり、それら洋式の調度品も、湯河原の風光明媚な自然とあいまって、晶子にとっては魅力的であったのかも知れません。



『山に向き…』（晶子直筆）

大島桜と蜜柑

湯河原の自然は、晶子の想像力も刺激し、たくさんの歌が湯河原で生まれました。中でも、真珠荘の離れで春に咲く『大島桜』や、秋に『蜜柑』や『桜紅葉』を見ることをこよなく愛し、これらは実に多くの歌などに詠み込まれています。

「吉浜の海水浴のみやびたり地方の子供あまた混れば」（昭和12年）

「吉浜の真珠の荘の山ざくら島に重なり青海に乗る」（昭和11年4月号『冬柏』）

「山に向き島をうしろにする路の蜜柑葉の香はいと哀れなり」（昭和12年）

昭和11年、晶子は知人に宛てた手紙の中で、次のように記しています。

「吉浜の花も美しく候ひき。かの秋（昭和9年）にあなた様と故人（夫鉄幹）が語りしベンチより見えしさくらのもみじ葉はこれぞと、ことさらその木に目のみゆき申し候」

晶子が、真珠荘のあった湯河原（吉浜）、大島桜や桜紅葉を好んでいたことがよく分かります。

晶子と湯河原、その後

11人の子もたちの養育や文筆業に奔走し、経済的には決して裕福ではなかった晶子に対し、有賀氏は物心両面で支援し、晶子の死後も、真珠荘の庭に与謝野晶子・鉄幹夫妻の歌碑を建立するとともに、毎年盛大な法要を営むなど、晶子に対する敬慕の念を持ち続けました。

昭和7年 晶子、湯河原へ

晶子と湯河原のゆかりは、昭和7年1月2日、晶子が夫鉄幹や門下生数名とともに、真鶴の画家三宅克己を訪問して歌会を開いた後、暮れから真珠荘に滞在していた画家中川紀元を訪問し一泊したことからはじまります。

晶子ら一行の突然の訪問を迎えた有賀氏の驚きと喜びは大変なもので、突然の来客にもかかわらず、有賀氏は一行を手厚くもてなし、その歓迎ぶりに晶子はとても感激したそうです。



晶子が利用したベッド



帽子をかぶる晶子

『吉浜の海水浴の…』（晶子直筆）



「直筆」に込められた晶子の思い

与謝野晶子と湯河原

「与謝野晶子関連資料展示会」開催中

11月29日（日）まで 10:00～17:00

町立図書館2階展示コーナーにて（期間中、展示換えあり）

※ただし、図書館休館日はご覧いただけません。

【問合せ】町立図書館 ☎63-4155

広報ゆがわら21.11月号 13